

子育て支援活動「すみれがーでん」10年の歩み

—乳幼児総合研究所・学生参加・振り返りと展望—

古橋 紗人子, 奥田 恵子

The Ten years History of the Infant-care Supporting Activity “Sumire Garden”

— Research Institute for Infant, Student Participation, Retrospective and Perspective View —

Satoko Furuhashi and Keiko Okuda

キーワード：乳幼児総合研究所・学生参加・振り返りと展望

1. はじめに

1990（平成2）年の出生率1.57ショックを契機に、子育て支援対策として、1994（平成6）年のエンゼルプランをはじめ、さまざまなプランが出されたが、2005（平成17）年、合計特殊出生率は最低の1.26となり、少子化は進行中である。国は子育て支援を最重要課題と位置づけ、次世代育成支援推進法では国、都道府県、市町村、企業においても行動計画の作成を義務付け、職場にも子育てと就労の両立支援の促進を図り、2010（平成22）年の合計特殊出生率は1.39となっている。

本学における乳幼児総合研究所（以下、乳総研）の設立は、少子化に伴う子育て環境の著しい変化に対する研究と、大学近隣地域の子育て支援を視野に入れた地域貢献の必要性に応じたものといえよう。少子社会における子育て支援には、保育者（保育士と幼稚園教諭の両者を含む）の役割の拡大、つまり、子どもの保育以外の多様なニーズに応えることが求められるようになったのである。具体的には、園児の保護者に対する支援に加えて、地域の子育て家庭のニーズにも応える重要な役割も担うのである。保育者養成大学である本学は、子どもを取り巻く社会の動向を理解し、地域の子育て支援要請に応える学生への実学教育のあり方を熟慮する時がきていた。

乳総研を設立した2002（平成14）年当時、大学が行う子育て支援活動に関する先行研究や報告例は見当たらず、手探りの状態でのスタートであった。大学の附属研究機関として乳総研を設立し、研究所の事業の一環として、地域子育て支援事業「すみれがーでん」が開設された。ここでは、「すみれがーでん」の10年間を中心として、これまでの活動を振り返り、その実態から今後の方向性と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

方法は、地域子育て支援事業「すみれがーでん」の10年間の年報・活動内容の記録・利用者アンケート、教員や事業関係者の記念誌への投稿原稿、及び、2013（平成25）年、日本保育学会において、奥田・古橋が発表¹⁾をした「大学における子育て支援活動」-「10年間のあゆみ」振り返りと展望-など、本事業に関するこれまでの研究内容などから今後のあり方を探る。

3. 10年間の歩み

3-(1) 乳総研「10年の歩み」

乳総研の所長は、幼児教育保育学科（以下、幼教）の学科長が兼任し、その運営に当る。現在の学科長であり本研究の共同研究者である奥田は、記念誌「10年の歩み」の発行に際して次のように述べている。

A“(前略) 本研究所は本学の卒業生への調査研究等とリカレント教育を意図しての「保育研究会」、低年齢児の保育と多様な需要に応える保育サービスとしての子育て支援事業で、学生の学びの場でもある「すみれがーでん」、地域に根ざした保育者養成校として保健・心理・保育面を重視し、指導的な役割を担って専門性を生かした「子育て相談室」の開設、そして県下の幼稚園・保育園・子育て支援団体等と連携し情報交換ネットワーク作りや講師・指導者の派遣、学生スタッフ・ボランティア等の派遣も少しですが組織としてやってきました。”

近年、少子化に伴う子どもを取り巻く環境が変化し、地域の公共機関や保育現場においても子育て支援の取り組みが積極的に取り入れられております。しかし10年前に本学の乳幼児総合研究所のような子育て支援をしている所は少なかったように思います。”

ここに述べられているように「すみれがーでん」は乳総研が全国に先駆けて創設した子育て支援事業の場であり、学生の学びの場であるが、それだけに、当初から現在にいたるまで何事もなく順風満帆でこられたわけではない。

3-(2) 10年間の実施内容

10年間の歩みについて、乳総研全体の活動をまとめた年報が表1であり、「すみれがーでん」の活動内容は表2に示す。表2の平成16年度の備考欄に「すみれがーでん」の各種活動の年間実施回数が20回に定着と記載されていることから、3年目にして活動が軌道に乗ったといえる。

3-(2)-① 「ママママ会」の誕生と消失

乳総研発足時から年一回は親子が集まって話し合うお茶会（表2）を開いていたが、子ども連れでは落ち着いて子育ての悩みを話合える状況ではなかった。平成16年に開始した母親同士が子育てを語り合う「ママママ会」は、早川先生が主導者でありファシリテーター役を担った。この会は、母子分離が原則であり、子どもを学生に預けて母親のみで参加する会である。母子分離の

表1 乳幼児総合研究所 10年の歩み

年 月	活 動 内 容
平成14年10月	乳幼児総合研究所設立 卒業生調査開始
15年 4月	卒業生に調査結果を発表
16年 5月	母親のおしゃべり会「ママママ会」開始
17年 4月	「すみれがーでん」を卒業した子どもの保護者が、ボランティアとして参加
18年 8月	第1期育児ヘルパー養成講座の実習施設として受講生の受け入れ
19年 8月	第2期育児ヘルパー養成講座の実習施設として受講生の受け入れ
20年 8月	全学的取り組み開始, 他学科教員によるクッキング・マナー講座開催
21年10月	中庭に「砂場」オープン, テレビ局や新聞社などによる取材を多数受ける
22年 4月	親子の集い「ほっほがーでん」開始にともない育児ヘルパーを導入する
23年 4月	授業時間の変更により, 「すみれがーでん」へのゼミ単位での参加が困難となり希望制に変更する

表2 「すみれがーでん」の実施記録

年 度	主 な 内 容	備 考
平成14年	講話2回・親子遊び2回・お茶会	11月から5回実施・身長と体重計測を含む
平成15年	講話5回・親子遊び3回・お茶会	年間9回実施, クリスマス会 附属幼稚園園長による講話1回を含む
平成16年	講話5回・ママママ会6回 クリスマス会・ふれあい体操	年間20回実施が定着, クリスマス会定着 母親のおしゃべり会「ママママ会」開始 心理学担当教員の主催による
平成17年	講話6回・「ママママ会」5回 パソコン遊び ² 2回・盆踊り サーキット遊び	幼教の学生は, ゼミ単位で全員参加 幼教の教員全員, 参加体制となる パソコン専用教室や, 体育館を利用
平成18年	講話4回・「ママママ会」7回 マリン演奏と, 楽器体験	幼教1回生, 全員見学体制となる ゼミ学習の成果を披露の場として利用
平成19年	講話1回・「ママママ会」4回 伝承遊び・参加型ペープサイト 学生の子育てに関する研究発表	「育児ヘルパー養成講座」実習施設となる 親の子育てに関する自助力を考察した内容 ゼミ学習として母親対象にPPでの発表
平成20年	講話1回・「ママママ会」1回 クッキング2回・マナー講座	全学的取り組みとなり他学科教員も参加 子育て講話, 1回となっていることが特徴
平成21年	講話1回・「ママママ会」2回 クッキング3回	砂場完成, マスコミが多数取材に来学 託児付のクッキング教室は, 希望者が多い
平成22年	講話1回・和太鼓・副笑い・迷路 サーキット遊び2回・迷路遊び	集いのひろば「ほっほがーでん」開始 (場の提供, 予約なし, 相談を気楽に)
平成23年	講話3回・コーナーあそび ダンス・ヨガ・クッキング	授業時間の変更: 参加学生, 希望制となる 外部講師の講座は, 予約制の内容が増加

活動は、多数の子どもを保育する人手と施設が必要となるため、保育所や各市町が主催する子育て支援活動では稀である。本学では、子どもたちを別室（天気の良い日は大学のグラウンドや砂場など）で預かることができるが、このような点も保育者養成大学が子育て支援活動をする意義の一つと考えられる。

表2によると実施回数は、平成16年6回、17年5回、18年7回をピークにして回数は減少している。母親のおしゃべりの会であるので、当然年によって話の内容には違いがある。母子分離が困難な子どもの多い年は参加数が少ない。この会は6年間継続したが、学内全体の授業時間変更に伴い平成21年度で消失している。

授業時間の変更は、ゼミ活動時間の短縮が余儀なくされたことにより、「すみれがーでん」への学生の参加の仕方や参加人数に大きな影響を及ぼしたのである。ゼミ活動の時間が大幅に短縮されたことにより、ゼミ単位での企画への取り組み（話し合いや練習時間の確保）が不可能となり希望者を募って存続しているが、参加学生数は半数以下に減少している。

3-(2)-② 幼児教育保育学科の学生と教員ともに「すみれがーでん」への全員参加をめざす

平成17年度より、幼教の学生、教員とも全員参加をめざした結果、ゼミ時間を活用することで実現の運びとなったのである。1回生はゼミの時間にゼミごとに全員見学することから始め、2回生もゼミ単位で企画・練習・実施・省察など記録する。そのようなプロセスを重視した参加の仕方が定着したのである。また、教員的全員参加により幼教教員による講話が増え、「プリミティブアートについて」「ガミガミ言葉にご用心」「お医者さんに行くのはどんな時?」「ヒーロー遊びと絵本」等のテーマが採り上げられた。

3-(2)-③ 「育児ヘルパー養成講座」の実習施設としての役割

平成18年度より厚生労働省委託事業「育児ヘルパー養成講座」を本学が会場・講師とも受託した。このことにより「すみれがーでん」の存在が、「育児ヘルパー養成講座」のカリキュラムの一環である実習の場の提供という重要な役割も担うことになったのである。中高年の人々の幸福感に視点を置いて換言すれば、シルバー世代対象の就労支援事業に協力したことといえる。人は生涯発達するといわれるようになった昨今、「おとなが育つ条件－発達心理学から考える」のなかで柏木は、社会的活動に積極的に関わり、その活動を通じて自分の能力や関心を発見し実践を通じて有能感や成長感を味わう²⁾と述べている。今後、大学に求められる地域社会への貢献の一つのモデル事業であったといえよう。

3-(2)-④ 全学的取り組み

平成20年度より全学的取り組みの重視については、表1の20年8月の活動内容に示されているように幼教以外の教員からも参加が得られることになり、ビジネスコミュニケーション学科の教員による「マナー講座」や、生活学科の教員による「パンづくり」や「クッキーづくり」は人気も高い内容として定着したのである。子どもを別室で保育したり、親子参加型にしたりする内容

の講座であったが、いずれにしても活動に広がりが見えた。

3-(2)-⑤ 砂場の完成と「ぼっぼがーでん」

平成21年10月、3号館の中庭に「砂場」が完成したことは、子育て支援活動を継続するうえで大きな進展であった。乳幼児が育つには、安心して戸外活動のできる安全な屋外環境の提供は必要不可欠であるからである。幼教の学生たちとは、砂場オープンの意義を共通認識したうえで、オープンセレモニーの企画を委ねることとした。NHKをはじめ、琵琶湖放送や新聞社3社からも取材を受けた。当日は学長の挨拶に続きテープカットや子どもへの記念メダルの贈呈など晴れやかな雰囲気の中、親子は砂遊びに興じたのである。

記念メダルも、砂場セットも学生の手作りであった。牛乳パックにエナメル絵具をぬり、モールの手をつけたミニバケツに、洗濯洗剤の計量スプーンで砂をすくったり出したりして、親子の遊びは楽しげであった。この砂場の完成が一つのきっかけとなり、ひろば型の子育て支援活動「ぼっぼがーでん」の開設につながったのである。

平成21年3月、厚生労働省児童家庭局長通知として「児童環境づくり基盤整備事業実施要綱」が定められたが、その趣旨は児童福祉法第6条の二第六項の規定に基づき、乳児又は、幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行うことにより、地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感等を緩和し、子どもの健やかな育ちを促進することを目的とする。とあり、実施形態(1)として、ひろば型が挙げられている。事業内容の(1)として、「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進。子育て親子が気軽にかつ自由に利用できる交流の場の設置や子育て親子間の交流を深める取組等の地域支援活動の実施。」とある。

国の要件には、毎日実施することや1日、10組程度の親子を対象とするなど定められているが本学は全くの自主企画事業であり行政からの助成を受けてないので、枠にはとらわれず子育て相談室と砂場を中心に、ゆっくり親子で過ごす場の提供をしている。

3-(2)-⑥ 「育児ヘルパー」の導入

平成22年度より「ぼっぼがーでん」の開設に伴い、「育児ヘルパー」を導入することとした。

「育児ヘルパー」はシルバー人材センターを通して派遣依頼をしたところ、応募者2名は本学の「育児ヘルパー養成講座」の受講生であった。本学で学んだ方々の就労に繋がったのである。彼女たちの確かな働きぶりに出会うたび、講師冥利に尽きるとはこのようなことであろうかと、私たち大学人も幸せな思いを味わったのである。

4. これまでの子育て支援に関する研究

4-(1) 「すみれがーでん」を利用する親の意識調査

子育て支援に関する最初の研究発表³⁾は、2006(平成18)年5月、日本保育学会第59回大会

であった。おもな内容は「すみれがーでん」を利用する親の意識調査であり、調査結果は表3に示す。全体の分析・考察は、本学の研究紀要第32号⁴⁾に記述しているので、ここでは子育て家庭への学生派遣を中心に振り返ることとする。表3のNo13、12は本学では学生派遣サービスを実施してはいるが、もしあったら利用するかを質問した項目であるが、昨年、他大学では実施していると報告があったので、あらためて当事の調査結果をみると、No13（アンダーライン）では子育て家庭への学生派遣を「ぜひ利用したい」と「利用したい」とを合わせると19名が希望していたのである。この数は他の項目に比べると多いとはいえないが、当時の育児相談の内容（ア～エ参照）と考え合わせると子育ての困難さが伝わってくる。

ア. 0歳と1歳の年子2人を風呂に入れる悩み。

イ. 自分のシャンプーは、実家でする。

ウ. 夕食の支度をはじめると、下の男の子がぐずったりまつわりついてきたりするので、この2年間は危なくて家では冷凍物のフライや、簡単なてんぷらでも1度も揚げていない。

エ. 幼稚園の行事には、下の子は連れて行けないルールだが預かってくれるところがない。

おなじ育児相談の内容の中に、育児家庭への派遣サービスに関しては

オ. 「ファミリーサポート」の利用は、サポーターに地域の年配者が多く、家に来てもらうことは躊躇する。

表3 親の意識調査 ◎印ぜひ利用したい ○印利用したい △印どちらともいえない ×印利用しない

No	内 容	◎+○の合計↓	順	◎	○	△	×
1	教員による講話、すぐ役に立つ子育てに関係のある話（歌演奏含む）	36	5	19	17	5	1
2	教員による講話、子育てに関係なくても教員の専門の話（歌演奏含む）	24	11	7	17	12	3
3	学生による人形劇や紙芝居、絵本よみ、手遊びなどイベント的な催し	43	1	21	22	0	0
4	学生による、子どもさんとの1:1または2:1など個人的な遊び	35	6	12	23	6	0
5	「ママママ会」母子分離して母親と心理学担当教員の話し合いの集い	28	9	10	18	12	2
6	教員と学生による遊び「絵の具を使ったあそび」	43	1	27	16	0	0
7	教員と学生による遊び「体育館での運動あそび」	42	3	34	8	0	0
8	教員と学生による遊び「ふれあいあそび」	42	3	26	16	0	0
9	親中心による、リトミックなど音楽あそび	29	8	12	17	9	4
10	親中心による、紙芝居、絵本読みなど	27	10	8	19	10	5
11	親中心による、子どもの喜ぶおやつ、おかずなど調理実習	30	7	10	20	5	6
12	Q 風呂サービス（体育館の大型風呂を親子で利用、学生が脱衣所で支援）利用する			1	3	15	24
13	Q 家庭への学生派遣（食事の仕度や入浴など、忙しい夕方の2時間程度）利用する			10	9	9	15
計	(No12・13は未実施のサービスについての質問項目であるため、合計に含まない)			186	193	59	21
%	(No12・13は未実施のサービスについての質問項目のため%を出していない)			40.5	42.0	12.9	4.6

とあるが、オ. の母親は、「本学の学生とは気軽に話せるし、若い人には気を使わないで子どもと遊んでもらえると思うので自宅へ来てほしい」と、本学の学生派遣を希望していたのである。当時、この要望に応えたいと、幼教学科会議に提案したが、事故が起きた時の責任問題を理由に反対多数で却下された。その時は時期尚早かと思ったが、子育て環境の違い、例えば、子どもの年齢や人数、夫の帰宅時間、祖父母などによる応援体制の有無などによって困難の程度は大きく異なり、このような支援を切実に望む家庭もあることを忘れてはならないと思う。

4-(2) 学内活動の実践と展望

2006(平成18)年9月、全国保育士養成協議会(以下、保養協)の研究大会において、古橋・早川は「保養校における地域子育て支援」-学内活動の実践と展望⁻⁵⁾を発表をした。この研究(注)により、「すみれがーでん」における学生指導への方向性が定まったと考えている。

同研究の目的は、「すみれがーでん」の目標である a) 地域の母親と子どもを対象に子育ての支援をする活動とネットワーク作りの場とする、b) 幼教の学生の実践教育の場とする、c) 乳総研における乳幼児の保育に関する研究の場とする、の3点のうち、b) の保育者養成の視点から、学生の実践教育の場としての効果、期待、今後の展望を含めて考察し今後の課題を探ることであった。学生が行う主な活動については、表4の「すみれがーでん」デイリープログラムに示した。

4-(2)-① 親子の参加状況

開設当初は、近隣の親子15組に限定した登録制とし、継続支援(研究機関としては継続研究)を目指したが、利用者は増加の一途をたどり、2005年度は66組登録。毎回40組前後の親子が参加していた。開設5年目には、生後6か月から参加した子どもが幼稚園などに入園して「すみれがーでん」卒業となった。

表4 「すみれがーでん」のデイリープログラム

時間	内 容	学 生 の 活 動
10:05	受付・名札つけ・出席シール・おたより配布	*10:30まで授業・着替えて入室
10:30	活動開始(担当者) 学生の保育開始・抱っこで散歩	・担当児の着替えなどを母親から預かる。 ・子どもの睡眠・排泄リズムを聞く
10:40	・うた・手遊び・人形劇・ゲーム ・眠い子はベビーベッドへ	・学生企画「お楽しみ」 ・子どもと遊ぶ・演じる。1:1で関わる
11:20	片付け	・子どもと片付ける。
11:30	親が迎えに来る・さよならの挨拶	・様子を母親に伝達
11:45	希望者は相談室へ ・身体計測・絵本の貸し出し・育児相談など	・活動記録を書く・相談室に付き添う ・担当教員と反省会・着替えて、退室する。

4-(2)-② 学生の参加状況

ゼミ単位で授業の一環として年1, 2回の参加と・夏春期休暇中の自由参加の2つの方法で参加する。ゼミ単位の参加は教員が講話を担当するか、学生が「お楽しみ会」を企画・実施する方法をとっているが、いずれにしても教員の指導や協力が不可欠である。開設当初は限られた教員のゼミ生が参加していたが、参加した学生から「すみれがーでん」は楽しくて、ためになると言った声が増え、学生、教員ともに全員参加した時期もあった。

4-(2)-③ 学生指導に関する考察

学生指導は主に次の2点であり a) 言葉づかいや身だしなみなど演習態度全般に対する注意喚起と b) 学生の企画による「お楽しみ会」にむけての相談と指導である。ここでは b) の「お楽しみ会」を中心に考察する。「すみれがーでん」の対象児は概ね0, 1, 2歳児であるが、少子社会にあって核家族で育った学生には、乳児と接する機会が少ないことは容易に予測できる。手遊びひとつとっても発達過程に添った内容を選択することは相当困難であり、幼児対象の内容が多い。困難にしているもう一つの理由として、関連科目である「乳児保育Ⅱ」「児童文化」の授業が2回生後期にあることから学ぶ時期が遅いことも影響しているとも考えられる。

発達過程の理解不足を示す事例をもとに具体的に指導・考察した事柄を述べることとする。2回生の学生から「お楽しみ会」でペープサートによる『くれよんのくろくん』をしたいと相談があった。その理由は「新入生歓迎会で児童文化研究クラブの先輩が見せてくれた時、感動したから…」というものである。そこで、クレヨンは何歳頃から使うか？ 在宅育児家庭での0, 1, 2歳児は家庭にあって親子でどのように過ごしているであろうか？ などの質問で子どもの実態に気づかせ、乳児には不向きな内容であることを気付かせた。このような「子ども理解」の指導が必要であった。

但し、ゼミ単位の取り組みであることから指導には慎重を要する。ゼミ担当教員のなかには、①学生の企画を途中修正すると、やる気を削がないか。②体験そのものを重視し事前指導は寛容でよい。③指導は学生の提案を認め激励中心とする。などと学生の立場を尊重し指導より体験すること自体を肯定的にとらえる考え方がある。当然、学生の意欲は重視すべきであるが、それ以上に教員サイドには学生への過剰な気遣いも伺える。例えば、決定した事項について学生のこだわりを尊重することを優先すると指導が入りにくくなる。また、学生の中には自分たちの企画の見直しを促されると、自信を失ったと過剰反応をする学生もいるからである。

結局、その「お楽しみ会」は「くれよんのくろくん」を演じた後、大きい紙のビリビリ遊びに移行することとした。つまり学生の意向も汲み取った上で後半に重点を置き、対象児が満足する開放的な体験型の遊びへ展開する折衷案を採用したのである。

安易な妥協は貴重な体験の場が学生の自己満足で終わる可能性もある。「すみれがーでん」は学生が子育て支援活動の実態を理解し体験学習する場であるという本来の目的の確認し、そこは

表5 人間関係に関する意識調査 幼教1回生160人対象

人間関係は、とても苦手	13人	8.1%
人間関係は、どちらかといえば苦手	53人	33.1%
人間関係は、さほど苦手ではない	79人	49.3%
人間関係は、苦手でない	12人	7.5%
不明・無回答	3人	1.8%

0, 1, 2歳児親子を対象とする場であるという実態を体験させることが必要である。その上で指導のあり方を教職員が共通認識して取り組んでこそ、学内に実践の場をもつ養成校が行う価値が生まれてくると考える。さらに、将来支援者として貢献する学生には、子育て支援の本質を理解する能力の養成が重要である。

4-(2)-④ 学生のコミュニケーション能力と今後の課題

「すみれがーでん」の活動開始後、活動記録をつけているが、参加回数の多い学生はそこに具体的な省察の記述があり実践学習の効果と認められる。一方、口頭での指導は内容理解以前に緊張が先立つ学生も多く困惑する。保育者は子どもや保護者などの人々との関わりを積極的にコミュニケーションをとっていく仕事であるが、コミュニケーション能力の育ってない学生も目に付く。本学でも表5のように人間関係に苦手意識を持つ学生が幼教に入学している。このような学生への指導方法が今後の課題である。対策としては人間関係や表現力の弱い学生の増加を予測して、早い時期から a) 0, 1, 2歳児の発達過程を理解しやすいような絵本や参考資料の提供 b) 緊張緩和の雰囲気づくり c) 自信の持てる課題提供などの仕方を探ることが今後の課題と考えている。

4-(3) 学生の「すみれがーでん」に対する姿勢と、子育て支援への理解

2007(平成19)年に引き続き保養協において、古橋・手良村・早川の共同研究による発表⁶⁾も学生指導に観点をおいたものであるが、過去5年間の実践経緯と新たな取り組みを踏まえ、「すみれがーでん」に参加する学生の基本的姿勢の課題と、アンケート調査等から子育て支援への理解について検討する。また保護者へのアンケート調査に基づいて学生への指導方法について検討し、その質的価値を考察し今後の課題を明らかにする。

4-(3)-① 学生の基本的姿勢

学生指導の基本的事項に、身だしなみや言葉づかいなどがある。子育て支援活動への参加であれば、服装・髪・爪・化粧などの清潔・安全への配慮は当然であるが、服装については近年の流行から露出が多い服装で参加する学生がいる。本年度よりユニフォームとしてエプロンを準備し着用することとした。これにより、状況に応じた身だしなみを学生が自覚する効果を期待するものであるが、それ以上に担当教職員等からは、安心して指導できるとの感想が聞かれている。

学生の対象児との体験実態調査結果

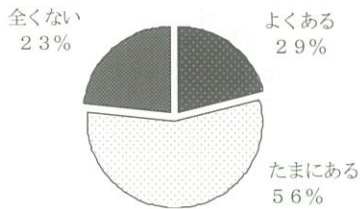


図1 遊びの体験

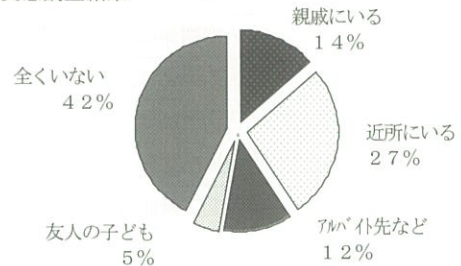


図2 身近にいるか

また、少子社会で育った学生が対象児と同じくらいの年齢の子ども（3歳未満児）に接する体験の実態調査をした結果については2つの図に示す。図1は遊び体験の有無であり、図2は身近に対象年齢の子どもがいるかである。アンケート調査の結果は想像以上に体験者が多かったが、「たまにある」と答えた学生の中には、中学、高校時代の体験学習での遊びを指した学生もいたのである。

4-(3)-② 学生指導Ⅱ 子育て支援活動の理解

学生が子育て支援活動に参加し、その経験が教育的効果を持つためには、学生自身が対象となる子どもの発達過程を理解し、地域子育て支援活動の目的を理解することが重要である。「すみれがーでん」の利用者は、在宅育児家庭の0、1、2歳（以下、対象児とする）の親子が中心であるため、幼児集団を対象に行う華やかなイベント活動のイメージからの脱却が必要である。学生の活動を対象児が「静かに見ていたから成功」と考えるのは適切とは言えない。対象児が楽しみ、興味を持つとはどのような姿であるかという視点の確認は重要である。

また母親の子ども理解を助ける場として考えれば、その活動内容の設定も重要である。例えば、子どもとの応答性を楽しむ遊びを通して、母親がわが子のかわいらしさ、いとおしさ、子どもの存在価値を誇らしげに再確認でき、そうした活動を学生とともに模索できることが望ましい。このような保護者と共有できる活動を取り入れた子育て支援の実践を行うためには、入学と同時に計画的かつ具体的な指導の積み重ねが必要と考えられる。

4-(3)-③ 2007年度からの新しい学生指導の取り組み

学生指導の充実を目的に、本年度より以下の4つの新たな取り組みを行った。

A) 学生の中には、入学前から「すみれがーでん」の存在を知っている者もいるが、概は未知の存在であり、子育て支援を十分に理解している学生は少ない。そこで、入学時直後に行う新入生向けのセミナーの中で、「すみれがーでん」の活動をスライド、ビデオを通して紹介する。

B) 1回生時の参加として、まず先輩の活動を見学する機会をスケジュールとして組み込む。

C) 学生の対人関係能力を補い、スキル向上を目的に、子どもの保育を担当する際に、自己紹介や保護者との確認事項を『コミュニケーションチェックカード』を使用してマニュアル化する。

D) 子育て支援の理解促進として、関連授業との連動を図る。1回生「保育原理Ⅰ」と2回生「乳児保育Ⅰ」において、子育て支援のあり方や乳幼児の発達過程について触れ、遊びについては絵本・手遊び・ふれあい遊びなど具体的に例示を用いて紹介する。

4-(3)-④ 学生の意識の変化

幼教へ進学してくる学生の多くは、子ども好きであり、子どもの保育に興味を持っているが、1回生へのアンケート結果(図1)からも分かるように、対象児は必ずしも身近な存在ではない実態がある。このような学生が対象児の保育や子育て支援に関心を向けるためにも、A)のように早期から正確な情報を伝えることが重要と考えられる。それによって活動への参加意欲が高まることも期待できる。またB)の取り組みの評価として、見学の有無別でアンケート調査を行った。その結果、見学の体験者は先輩の活動を目の当たりにして「難しさ」を実感し、「慎重さ」を必要と感じつつも、見学の必要性や参加への意欲を維持している。また、先輩の活動に対して高い評価を示し、モデリングの効果が期待できることが判明した。1回生の学生にとっては、ただ単に“楽しそう”ではなく、活動の意味を学び、質の高い実践への動機付けを高める道筋となり得ると思われる。

表6は、学生の活動参加についての保護者(母親)へのアンケート調査結果である。学生の参加は好意的に受け止めている反面、C)の「コミュニケーションチェックカード」の導入については、評価が分かれている。学生および保護者へのカード導入の説明と理解不足などから充分な

表6 学生参加に対する母親の意識調査 (n = 11)

項目	評価		
	よい	よくない	どちらともいえない
学生が参加すること	11	0	0
挨拶・自己紹介	9	1	1
子どもとの遊び方	7	3	1
母親との話し方	7	3	1
学生の声の大きさ	8	2	1
心はこもっているか	10	1	0
チェックカードの導入	6	1	4
活動全体の感想	9	0	2
自由記述の主な内容	学生さんによっていろいろの人がいる。子どもに慣れていない学生さんがいる。子どもは、いつも楽しく参加している		

効果が得られていない可能性がある。あるいは、学生のコミュニケーションのスキル（話し方、声の大きさなど）は評価が高いことから、2回生の学生では、それまでの実習経験等の学習により、一定のレベルのスキルは習得されているとも考えられる。

4-(3)-⑤ 学生指導の今後の課題

「すみれがーでん」への参加が学生に有益となるためには、学生の基本的姿勢の改善から子育て支援の理解と実践力の向上を図れる計画的な取り組みが必要である。今年度からの新しい取り組みにより1回生には新しい道筋が示され、その効果が期待される。4-(3)-③におけるDの授業との連動の成果も、これからの活動に反映され、より質の高い活動の設定が提示されることが期待される。

保育士養成に関連する授業時間には制限が厳しく、その中でゼミごとに取り組む内容と参加回数にはバラツキがでている。敏感な学生はこの不公平さに不満を感じている者もいる。今後は、質の追及と同時に学外活動を地域連携の一環として考えていくことが課題である。また学生の高い動機付けを実践まで保障する学生指導の工夫と充実も今後の課題である。

4-(4) 学生の意識の変化と指導

2008（平成20）年9月、保養協における3年連続の研究発表⁷⁾は、キーワードとして「子育て支援」・「実践教育」・「システム化」の3つをあげたように、過去2年間に新たに取り入れた学生指導の充実のための取り組み A)「学生の参加のしおり」の作成 B) 保育の企画への準備期間の確保 C) 授業との連動の充実 についての学生の意識の変化の検討であった。

また、「すみれがーでん」での子育て支援とは、対象児の発達過程を考慮すれば、幼児集団を対象に行う華やかなイベント活動のイメージからの脱却は必須である。その改革を目指して企画した、「感覚遊び」やオリジナリティーを取り入れた「親子のふれあい遊び」について繰り返し指導したことは、学生の意識をそのような方向へむけさせ、学生の活動の質を確実に向上させていると思われる。

4-(5) 「10年間のあゆみ」振り返りと展望

乳総研が設立して10周年にあたる2013（平成25）年、日本保育学会において、「大学における子育て支援活動」のテーマで発表¹⁾した研究の目的は、地域子育て支援事業「すみれがーでん」の10年間の活動を振り返り、今後の方向性と課題を明らかにすることであった。

保育内容については、子ども理解と、地域の子育て家庭の保護者理解による「子育て支援の視点」を保持することが10年間常に変わらぬ課題であった。利用者には華やかな（受身でも楽しめる）企画を好む傾向があり、学生もそのような企画に達成感を感じがちであるが、子育て支援は、親育ちの場であることへの意識付けはこれからも保ち続ける必要がある。

5. 「すみれがーでん」の今後の方針

子育て支援活動「すみれがーでん」が目指す方向性としては、何組もの親子が気楽に集え、親の自助力をも育成できる「場」を提供することである。しかし、「すみれがーでん」へ通う親達の中には、地域の公共機関では経験できない学生の企画を期待する声も多く聞かれる。また、地域の子育て支援センターから児童文化研究クラブへは公演依頼もある。見て楽しむ内容が求められていることは理解している。

一方、将来子育て支援の専門家になる学生には、子育てに自信の持てない親が親になっていく過程を共に体験できる「すみれがーでん」を貴重な学びの場と考えることを期待する。親としての自助力の養成に対する支援の必要性を考えると学生の企画による保育内容は重要である。学生が熟慮した保育内容が入り口となって、親子が楽しみながら集う場を「すみれがーでん」が提供するのであれば、保育者養成大学が行うに相応しい価値ある事業と言える。記念誌、「乳総研10年の歩み」のなかで共同研究者である奥田は、“今後は「すみれがーでん」が学生の学びの場として子ども達が楽しむものを演じるだけでなく、お母様方が催し物を担当するなど主体的・積極的な活動の場を提供として利用していただければと願っています。”と述べ“これからの乳幼児総合研究所のあり方もより地域に根ざした活動へと発展させていけるように努力をしまいたいと思います。”と結んでいる。

6. おわりに

乳総研10年を振り返る時、特に「すみれがーでん」の歴史は大学の自主企画によることから可能な事業展開（緩やかな自主性の尊重）が行われたともいえる。行政の助成を得ない利点から40組限定として、調査研究にも軸足を置けたこともそうである。一方、地域の限られた方への貢献であったことには大学がする傲慢さと受け取られてはいないか心苦しくもある。今後は、赤ちゃんと外出中に授乳やオムツ換えに気楽に立ち寄ってもらえる「赤ちゃんの駅」^{注)}や、地域に必要性があれば、「家庭的保育事業」「一時預かり事業」なども展開して地域の子育て支援の拠点となることも視野に入れ、質的な深化と場の拡大にも志も高く持ちたいと考えている。

引用・参考文献

- 1) 奥田恵子・古橋紗人子 2013 大学における子育て支援活動－「10年間のあゆみ」振り返りと展開
日本保育学会 第66回大会
- 2) 柏木恵子 著「大人が育つ条件―発達心理学から考える」岩波新書 2013 P208
- 3) 古橋紗人子・森 宇多子 2006 子育て支援活動の実際と展望－短期大学の自主企画による－
日本保育学会 第59回大会
- 4) 古橋紗人子 2007 大学における子育て支援活動の研究－「すみれがーでん」の実際と展望－
滋賀女子短期大学研究紀要 第32号

子育て支援活動「すみれがーでん」10年の歩み

- 5) 古橋紗人子・早川滋人 2006 保養校における地域子育て支援－学内活動の実践と展望－
全国保育士養成協議会 第45回研究大会
 - 6) 古橋紗人子・手良村昭子・早川滋人 2007 保育士養成校における地域子育て支援－学生指導の観点から－
全国保育士養成協議会 第46回研究大会
 - 7) 古橋紗人子・手良村昭子・早川滋人 2008 養成校における地域子育て支援－学生の意識の変化と指導－
全国保育士養成協議会 第47回研究大会
- 注) 赤ちゃんの駅：各自治体が運営するものであり社会全体で子育て家庭を支える意識の醸成を図るための事業の一つ。授乳やオムツ換えのために気軽に立ち寄れる施設であり、自治体ごとにシンボルマークを決めて「ベビーステーション」「赤ちゃんフラット」などの呼び方で、子育て家庭の外出を応援している。大津市では駅に登録できる事業者や店舗を募集中であり、平成25年9月現在 赤ちゃんの駅登録数は170施設程である。